



札幌地区
宣司評
だより

TO

と

MO

も

NI

に

第39号

発行日：2011年3月30日

●発行責任者：札幌地区長 勝谷 太治 ●発行所：札幌地区宣教司牧評議会／札幌市中央区北1条東6丁目

東日本大震災の被災者のために祈りましょう

東北関東地方で発生した大地震は未曾有の大災害となりました。想像を絶する被害が発生し、多くの方が犠牲になり、さらに多くの方々が全てを失い苦しい避難生活を送っています。被災から一週間を経ても、被害の全容は正確に把握されていません。加えて福島における原子力発電所の災害は、なお予断を許さない状況にあります。

仙台教区を中心として広い地域に被害は及んでおり、教会が受けた人的または物的被害は、まだ正確に把握されていませんが、仙台教区本部にはカリタスジャパンの協力の下サポートセンターが設立され、ボランティアの受け入れの調整や支援活動の立案にあたっています。カリタスジャパンによる人道支援全般への募金も開始され、教区から当面の対応についての文書が届いていると思います。被災地では寒い毎日が続いており、避難所での生活は困難を極め、現地での活動も容易ではありません。被災者が平穏な生活を取り戻すには、長い時間と物心両面の援助が必要になります。

菊地司教は被災者の方々のために祈るように勧めています。

「苦しみのある方々と祈りのうちに連帯しましょう。亡くなられた方々のため、また怪我をされた方、愛する人を失い悲しみのある方、すべてを失い絶望のある方、また救援や復興のために尽力しておられる方々、すべての方々のために一緒に祈りましょう」

3月19日 札幌地区長 勝谷 太治

教皇ベネディクト十六世の見舞いのことば

教皇ベネディクト十六世は、日本の東北地方沿岸部を突然襲った大地震とそれに続く津波がもたらした惨事に深い悲しみを覚えつつ、今、困難な状態に置かれているすべての被災者のかたがたに寄り添うことを約束します。教皇は亡くなったかたがたのために祈り、悲しみのあるそのご家族と友人の皆様を神が祝福し、力と慰めを与えてくださることを祈り求めます。教皇はまた、今回の災害の犠牲者の救命、救助、支援にあたるすべてのかたがたに祈りをもって連帯することを約束します。

祈り

あわれみ深い神さま、あなたはどんな時にも私たちから離れることなく、喜びや悲しみを共にして下さい。今回の大震災によって苦しむ人々のためにあなたの助けと励ましを与えて下さい。私たちもその人たちのために犠牲をささげ、祈り続けます。そして、一日も早く、安心して暮らせる日が来ますように。また、この震災で亡くなられたすべての人々があなたのもとで安らかに憩うことができますように。母であるマリアさま、どうか私たちのために祈りください。

主キリストによって。アーメン

日本カトリック司教協議会会長 大阪教区大司教 レオ池長 潤

2010年度 札幌地区講演会

「福音の喜びを伝える」

2011.2.20 北11条教会 講師：晴佐久昌英神父

札幌地区の講演会が、晴佐久昌英神父（東京教区多摩教会主任司祭）を講師に開催されました。広い北11条教会の聖堂も立錐の余地がないくらいに埋まって、700人程の参加でした。晴佐久神父のお話は、聖霊が直接語っているように感じます。それは、神様を深く信頼していて全く迷いがないからです。原稿なしで聖霊が導くまま自由に話します。その一言一言が深く心に届きます。聴衆と一体となった恵みのひとときです。そのような講演を短い紙面でまとめることはとてもできませんが、なるべくコンパクトに、かつ話した言葉をなるべく忠実に記すように努めました。

○ミサの説教（マタイ5.38～48）

「父は悪人にも善人にも太陽を昇らせる」こういう言葉を聞くと悪人でよかったなと思いますね。私も皆さんも悪人です。悪いこといっぱいしてます。そういう悪人にも神様は手を差し延べてくれます。感謝するしかありません。私はここに来る途中の電車の中で非常に悪いことをしました。窓から雪景色を見て喜んでる女の子がいたのに、どうにも陽が眩しくてブラインドを下ろしたんです。途端に「ママ、お外が見えない」ああ悪いなと思ったけど、そのブラインドは透き通っていたので、心の中では「見えるだろう」と思っていました。お母さんが「見えるところへ行きましょう」と二人でデッキへ行ってしまう。「これから福音を語りに行くのに、俺はなんて冷たい男なんだ」と落ち込みました。女の子はすぐ飽きて戻ってきましたけど、席には別な人が座ってました。向かいの席に座っていたお父さんが「おいで」と女の子をひざの上に座らせてくれました。女の子は最初は「パパのひざの上に座る」と言って、「ダメ」と言われてたんですが、私の悪のおかげで希望通りになったんです。



ミサ司式



晴佐久神父と勝谷地区長

みんな善だ悪だと簡単に区別しようと思いますが、善でも悪でも全てを受け入れて、赦して、善いものにしてくださる神様に信頼をおいているか。神様の愛の中で生きていることを信じているか。これが基本です。この基本があれば「右の頬を打たれたら左の頬も出す」ということが自然にできるようになります。イエスの生涯は左の頬を差し出すものでした。最後は自分を釘打っている人のためにも祈りながら、悪人にも神の愛が注がれることを示したかったのです。我々は、それを信じて洗礼を受けました。その完全さをちょっとでも身につけたら奇跡のようなことを行うことができます。

○聖霊の働き

さっきこんな写真ももらって、泣かされました。この古い写真には、アウグスチノ神父と両親そして母に抱かれた赤ん坊の私が写っています。53年前のこの時から、主は今日のこの場を用意してくださっていたのです。アウグスチノ神父は高校生の時、ある宣教師から日本における宣教が「とても重要であるがとても困難」という話を聞いて、日本での宣教に熱意を燃やし、幾多の困難を克服して札幌に来て円山教会を建てて、好奇心で教会に来た高校生だった私の母に「洗礼受けなさい」と半ば強引に洗礼を授けた。その出会いがなければ今の私はここにいない。宣教師との出会いがなければ、アウグスチノ神父が日本に来ることもなかった。その宣教師も誰かと出会っている。そうやって遡っていくとイエス・キリストにたどり着きます。全てのキリスト者はイエスにつながっています。聖霊の働きによってイエスは生きています。皆さんは今、聖霊の働きを体験しています。



力強いメッセージ伝えます

○座右の銘

私の大好きな座右の銘は「自分のことを棚に上げて」です。自分でも「よくそんなこと言えたもんだ」と心の中で思うときありますよ。でも、こんな私が選ばれて神様の言葉を語らせてもらえるんだから、信じて語ろう。どんな場面でも聖霊が働いてくれるから恐れることはありません。みんな「こんなこと信じてもらえないだろう」とか「自分の言葉じゃ足りないだろう」と恐れるんです。恐れるから言葉が出てこないんです。私なんか駅からのタクシーで運転手さんに宣教しましたよ。「私が話すから是非来てください」って。「自分のことを棚に上げて」も全然構わない。神様が出会わせてくださったんだから、そこで私たちが一言口を開くか、閉ざすかで歴史が変わります。キリストの時代からそうだったんです。

○福音を語った数だけ救いがある

「洗礼受けなさい」という一言が私の原点だから、私は語り続けます。福音を語った数と洗礼数は正比例します。日本で信者数が伸び悩んでいると言われますが、理由は明白。語ってないからです。私はいっぱい洗礼授けてますけど、それだけ福音を語っているということです。また、多摩教会の信者がどれだけ語っているかということです。みんな同じです。愛されたいと思っている。救われたいと思っている。そこに一言「神様はあなたを愛している」「あなたは愛されるために生まれてきた」と言ったらいいんですよ。あとは聖霊が働いて、あれよあれよという間に何かが起きます。百人に語ったら一人くらいは教会にくるかもしれない。十万回語ったら、千人くらいが関心を持って、百人くらい洗礼を受けて、一人くらい神父が生まれる。アウグスチノ神父は十万回は語ったはずですよ。だから私がいます。難しいところは神様が全部やってくさいますから、皆さん語りましょうよ。

多摩教会では入門講座をすごく大事にしています。900人くらいの教会ですが入門係が25人います。去年洗礼を受けた人が「お世話になったから今度は自分が」と入門係になります。私はこの25人を徹底的に育てます。彼らは教会の宝です。多摩教会の信

者は、「いいから来なさいよ」って言うように躰けられていますから言いまくります。信者の数がどんどん増えますよ。

○「だいじょうぶー」

「あぶうばぶう」というクリスマス絵本をドン・ボスコ社から出版しました。福音が溢れてくるような絵本にしたいと引き受けました。あらすじは、『イエス様は生まれたばかりで「あぶうばぶう」しか喋ることができませんが、困った人がくると小さなお口を大きく開いて「あぶうばぶうだいじょうぶー」で羊飼いや博士たちも幸せに。次は君の番。ひとりぼっちや悲しいことや辛いことがあったら、どんなことでもイエス様に話してごらん。イエス様は小さな口を大きく開いて「あぶうばぶうだいじょうぶー」ほれ、友達が一緒に遊ぼうと言っている。イエス様はみんなのために生まれました。』イエス様が絵本の中から直接読んで人に語りかける絵本にしたいと作りました。そもそも「大丈夫」って言いたいのは神様なんですよ。天地の創造主が「ああ失敗した。俺にもできないことがあったか」なんて言うわけがありません。我々が「大丈夫じゃない」とか「もうだめだ」と思っているだけなんです。

この絵本をおばあちゃんが買って、孫娘に読んで聞かせました。孫娘は何かがあって幼稚園に行けなくなっていたんですね。この絵本の最初の「あぶうばぶうだいじょうぶー」で顔がパツと変わった。一緒に大きな声で「だいじょうぶー」。本当に喜んで「だいじょうぶー」と言い続けて幼稚園に通うようになりました。この子はイエス様に会ったと思います。おじいちゃんが病気で手術前の不安なとき、孫娘がこの絵本を持ってきて「だいじょうぶー」それを聞いたおじいちゃんは嬉しかったでしょうね。何の不安もなくなった。治ったあと一緒にミサに来たので、「あなたの大丈夫をおじいちゃんに言って良かったけどみんなも聞きたいから」というと大きな声で「だいじょうぶー」。これは福音宣教ですよ。5歳の子が一番本質的なことを、「大丈夫」って言ってほしいときに言う。それは聖霊の働きです。5歳の子ができるんだから、皆さんも「大丈夫」と言いましょうよ。「大丈夫、これで私は救われた」と。



満員の会場

○「神の国」

昨年11月頃、ある人と言ひ合いになり、自分も悪かったけど、「そういう神父は教会にとって本当に邪魔だから、神父をやめてくれ」と言われました。彼とはいろいろ語り合った仲でもあったし、本当にショックでした。こういうことがあると全てネガティブになってしまう。何をやってもマイナス思考ですごく落ち込みました。ちょうどその頃ロシアのサンクトペテルブルグへ旅行したんです。そこのエルミタージュ美術館にレンブラントの『放蕩息子の帰還』があるんです。この絵が大好きで、写真ではよく観てたんですけど実物は初めてです。絵の前で祈ろうと思いました。絵を説明した有名な本があるんですが、その本を絵の前で読めば必ず力づけられると思いました。美術館の大きな絵の前で、本を読んでは絵を見上げて、ゆっくり2時間くらいかけました。「お前は失敗したが全部ゆるす、お前を受け入れる」「なぜならお前を愛しているから」黙想しながら読んでいると疲れるんですよ。そばで椅子に座っていた係のおばさんが不審そうに何度も見ます。次々と人が来るから邪魔にならないように移動して、とうとう疲れて壁に寄りかかって読んでいたら、おばさんが立ち上がってこっちへ来ます。「もう行け」と言われると思ったら、椅子を指さし身振りで座れと、自分は立って私を座らせてくれました。私も傷ついていたこともあって涙が溢れてきました。その時、本当に神様が「いいよ」「大丈夫」「そんなに苦しむな」「私に任せなさい」と言ってくれたのがわかりました。人との関わりがどれほど大きいか。椅子を譲るなんて、ちょっとした事ですよ。でも、それがその人にとって忘れられないような大きなことになる。そのおばさんも私を見ていて、「この人はよほど辛いことがあったんだ。なんとかして



即席のサイン会も長蛇の列

やりたい」と思ったんでしょう。そういう気持ちで世界をつくっていく。ほんの一瞬、ほんの一言、素晴らしいことを神様のために捧げることで神の国はつくられていきます。

○札幌地区の皆さんへ

どうか皆さん、希望をもって札幌の地に神様の救いを伝えてください。私なんかダメって皆さん思ってるかもしれない。それは、神様のことを全然わかってない。あなたがいなければ神様が世界をつくった意味がない。だから、私たちはこの世界で見るもの、聞くもの、出会う人、全てを素晴らしい神の世界にもっていくことができる。神の国はもうはじまっています。イエス様が「幸い」って宣言した時から今日までずーと続いています。そのことを何としても伝えたい。それを皆さんでやっていきましょう。皆さんはそのために生まれてきました。今日ここにいる理由はそれです。こうして呼んでくれたおかげで私も励まされました。また頑張ろうという気持ちになりました。感謝します。

(文責：広報 能町浄彦)

講演会「カトリックの葬儀」

2010年11月21日(日) 円山教会 講師：鈴木 隆氏

「人間の存在」神様の愛の息が吹きこまれて「生きるもの」とされた。

人は、息をひきとると、即、腐敗が始まるという。だから納棺の前に、きちんと消毒する。

私の場合、今までに肉親としては、祖父母、両親、妹を見送りました。妹は健康で働き続け、その日もお弁当を作り会社へと出勤する途中、道で心臓発作をおこし神様のみもとへ旅立ちました。東京の警察署から連絡をいただき飛んで参りました。警察官の方に「きれいな身体でしたよ」と慰められました。東京での一人暮らしでしたので、所属していた徳田教会の皆様方に、何から何までお世話になり葬儀をすませ、お骨として帰って参りました。

教会での葬儀のお知らせがあれば、出来る限り参列し生前をしのびお祈りしております。講師の方の本当にやさしい笑顔とお話に、神様と人ともに奉仕する謙遜な姿を観て、感動し尊敬いたしました。

(円山教会 山崎斯美)

札幌地区交流会 “男性の集い” の開催

札幌地区男性交流会が2011年1月22～23日に北広島クラッセホテルで開催されました。この交流会は、小教区で苦勞している者同志がよく知り合い支え合うために、交流し友情を育むことを目的に昨年から始まりました。今回は、菊地功司教、勝谷太治地区長と札幌地区の12小教区から司祭2名、信徒29名の合計33名が出席しました。

開会にあたり、勝谷地区長が、信徒の皆さんに司祭に代わってできる部分を担ってほしいこと、また、祐川神父のフィリピンでの活動が大きく展開していることに将来の明るい希望を持っており、これからの教区の活動に生かしたいと挨拶しました。

全員の自己紹介の後、菊地司教から提言を受けました。司教様は、年頭司牧書簡で示した「問題の根幹はどこにあるのか」というところから話し始めました。「昨今、どこに行っても教会の危機的状況にどう対応するかということをお話してくれと頼まれます。司祭の高齢化と召命の不足。若者がいない教会はこれからのどうなるのか。学校や病院の運営はどうなるのか。確かに今まで築き上げたものを守らなければならないと考えれば危機的状況です。でも、私はそうは思いません。教会は今を生きています。教会は、その時時に与えられた神からの招きにしっかり応えていく人の集まりですから、その時に出来る事しか出来ないのは当たり前であり、今、我々に求められていることは何かを考えることが重要です」と呼びかけました。

また、自身のガーナでの司牧体験から、「司祭が少なくなっても信徒一人ひとりが自分の役割をしっかりと見つめ直して、それを担っていくことによ



て教会共同体はしっかりと生き続けるどころか、育って、広がっていくものである」と信徒の役割について説きました。そして、最後に「我々の使命は福音宣教であるが、福音宣教とは何かをすることではなく、教会共同体にこそ『本当の人間の絆』があるということをお世に示していくこと」と指摘しました。『無縁社会』という言葉で語られ、社会の絆が失われて孤独と不安が覆う現代社会で、教会こそが『命の源』につながった真の交わりの場であることを世の中に示すことが今の時代に求められており、そのためには社会の現実を一番よく知っている信徒一人ひとりが自分の役割を常に考えていくことが大切であると強調しました。

その後、皆で温泉にゆっくりとつかり、お楽しみ会のハッピーアワーで分かち合いも最高潮に。「まだまだ男が頑張らなければ。」と夜は更けていきました。翌朝、北広島教会での司教ミサに与り、来年の再会を約束してそれぞれの小教区に派遣されていきました。(広報 能町浄彦)



「非暴力平和旬間の講演会、開かれる」

1. はじめに

マルチン・ルーサー・キングJr. 牧師の誕生日である1月15日(1929年)から、マハトマ・ガンディ暗殺日の1月30日(1948年)までの2週間を、札幌地区では「非暴力平和旬間」と位置づけ、8月とは別に取り組みをはじめている。これは日本カトリック司教団が戦後60年に発表した『平和メッセージ』の結びに示された。“非暴力を貫いて連帯を”という精神に啓発されたもので、2010年1月15日には、北大准教授の中島岳志さんを講師に招き、「マハトマ・ガンディの非暴力について」の講演会を開催した。そして今年の1月15日には、「マルチン・ルーサー・キングJr. 牧師の思想と行動」と題して、新海雅典神父が聖ベネディクト・ハウスで講演した。

2. アメリカ大陸における黒人奴隷制度の歴史

1492年クリストバル・コロン(俗に言うコロンブス)による新大陸ラテン・アメリカへの侵略のはじまりにより、中米のマヤ文明、南米のインカ文明が次々と滅され、先住民インディヘナが奴隷化されてゆく。その先住民の人口が激減すると、17世紀に入り遠くアフリカ大陸から黒人奴隷を導入しはじめる。まずブラジルとカリブ諸島でのサトウキビプランテーションに、更に北米にもコーヒー、タバコ、ゴム、綿花の栽培に、農業労働力として黒人奴隷たちを酷使するようになる。黒人たちはアフリカ大陸から人間としてではなく“商品”として扱われ、奴隷貿易によって過酷な旅を経て新大陸にまで連行されてきた。この黒人奴隷貿易によって運ばれてきたアフリカ系住民の数は、およそ1,500万人以上と言われ、この「三角貿易」によってヨーロッパにもたらされた莫大な富は、王や貴族・富裕な商人階級の豪華な生活を支え、教会の大聖堂建設をもたらし、更に産業革命の資本蓄積ともなっていた。

さて、アメリカ合衆国の『独立宣言書』(1776年7月4日)には、「すべての人間は平等につくられ、創造主によって生存・自由・そして幸福の追求を含む、侵すべからざる権利が与えられている」と謳われている。しかしここで言う「平等につくられた人間」とは「白人」だけのことであり、先住民族や黒人の存在は除外されていたと言える。その後1808年連邦議会によって、非人道的な「奴隷貿易」は廃止されるが、「奴隷制度」はなお生きつづけ、1863年の南北戦争の最中に発布されたリンカーンによる「奴隷解放宣言」によって、制度的な奴隷制は一応

無くなった。しかし実際に南部諸州の農園などでは、黒人たちへの搾取労働と差別は根強く残存しつづけた。

3. キング牧師の生涯とその闘い

マルチン・ルーサー・キングJr. は1929年1月15日、ジョージア州アトランタ市で誕生する。少年時代は父キング・シニアが牧師として人種隔離制度(公共の場において黒人を低い地位に分離させ白人を優遇する制度)や黒人差別に、毅然として戦う姿を見ながら育った。若い頃から成績優秀だったので、高校を2年で終了し、当時“黒人のハーバード大学”と呼ばれたモアハウス・カレッジに入学する。はじめは「法律家」を志し、黒人の人権を侵害している政治的問題と社会悪に対して法律面から挑戦しようと考えた。しかし南部黒人教会のもつ社会的福音の重要性に気づき、牧師の道をめざすようになる。そこで1948年にクローザー神学校へ進み、ガンディの非暴力の思想などにふれ、更にボストン大学神学博士課程では自由主義神学なども学んだ。そして1954年25歳の若さで、アラバマ州モンゴメリー市の黒人バプテスト教会の牧師に就任する。ところが翌年この町でキングの運命を変える事件が起こり、まさに「時が満ちて」(マルコ1章15節)、彼は黒人解放運動の表舞台に登場することとなる。それが「ローザ・パークスのバス事件」である。このローザ・パークスという名の黒人女性が、混み合った市内バスの中で、黒人席を白人に譲らなかった事で逮捕された事をきっかけに、1年以上にわたる「バス・ボイコット運動」が展開され、キングはその運動の代表として活躍するのである。そして1956年6月、連邦地方裁判所は、市バスにおける人種隔離は合衆国憲法修正第14条違反との裁定を下し、キングらは一応勝利する。

その後キング達は、黒人の完全なる市民権と平等を達成するため、非暴力による運動組織として「南部キリスト教指導者会議」を結成し、さまざまな闘いを展開してゆく。

- ①1957年5月「祈りの巡礼運動」
- ②1960年1月、ノースカロライナ州における「坐り込み運動」(シット・イン)
- ③1961年3月、南部諸州をバスでキャンペーンする「フリーダム・ライダーズ運動」
- ④1962~3年、「バーミンガムの闘い」では、白人優越主義者らの烈しい弾圧と闘う。

これらの運動の成果として、1964年6月に、「公民権法」が成立する。そしてこの年の9月に、キングはバチカンで教皇パウロ6世に謁見し、12月には「ノーベル平和賞」を受賞する。その後もキングらは完全なる黒人の自由と平等を勝ちとるため、1965年「セルマの闘い」、「シカゴのパンかご運動」、更に1966年からは「ベトナム反戦運動」へと突き進んでゆく。これら米国社会の根底に存在する「人種差別主義」・「物質主義と極端な貧富の差」・「ベトナム戦争を遂行する軍国主義」の三悪を変革しようとする挑戦は、一方で厳しい迫害と暴力的な弾圧を招くこととなる。そして1968年4月4日、テネシー州メンフィスにおいて、キングは暗殺者の凶弾によって39歳の若さで天国に召されたのである。

そこで結びに、1963年8月28日のワシントン大行進におけるキングの有名な「私には夢がある I Have a Dream」の末尾の言葉を引用して、キング牧師の夢と理想が現実となる日が来ることをともに願いたい。

「『正義が洪水のように、恵みの業が大河のように尽きることなく流れる』(アモス書5章24節) ようになる時、……

すなわち私たちがすべての村や集落、すべての州や町から自由の鐘を鳴り響かせる時、その時こそ私たちが、黒人も白人も、ユダヤ人も異教徒も、プロテスタントもカトリックも、すべての神の子たちが手を取ってあの古い黒人霊歌を口ずさむことができる日を早めることができるのである。

全能の神に感謝すべきかな、われらはついに自由になった！」と。(報告 新海雅典神父)



臨時聖体奉仕研修会を受講して

2010年11月14日(日) 北26条教会 講師：上杉・エムリク神父

月寒教会 山下 勇

上杉、エムリク両神父様、カウンセラー講話等々を通して学ぶ機会を得ました。

①上杉神父様の講話から

小高神父様(OFM)著作「旅人の糧」から祈りで始めました。聖体奉仕は、社会への福音宣教の一端である。

教会はおだやかに、神の言葉、光、御聖体が届かない場合、それを共同体の奉仕者として行うことである。

そのため、小教区主任司祭の許可を得、聖体奉仕を行うのが原則である。と同時に霊的に実状に合せ主任司祭の指導を願うことを忘れてはならない。あくまでも共同体の一員として兄弟、姉妹に奉仕することであり、決して主任司祭の代理ではないことを大前提に考えることが求められる。

ですから共同体からの任命された自覚を持つ必要です。奉仕者は御聖体の秘跡を理解するため「旅人の糧」「いのちを与える聖体」さらにミサ以外のときの「聖体拝領と聖体礼拝」「聖体訪問」等々御聖体に関する「学び、祈り、黙想、観想」を継続することが日々大切であると感じました。

②エムリク神父様の講話から

病人の方は、病気の結果自分自身教会に行けない。またある意味自分自身わからなくなっている状態です。

共同体に参加出来ずにいるため聖体を奉仕されることを望んでいる。基本的に病人でなく人を「訪問する心掛け」その人全体を認識する必要が大切です。

特に言葉に配慮し、家族の方と相談、連絡を密に病人を把握する必要があります。

どうしても聖体拝領が出来ない場合は、「霊的聖体拝領の祈り」を共に祈ってはどうでしょうか。

主任司祭に必要な事柄は、相談、指導を受けるべきです。いずれにしても病人は、人と「違う」という先入観から人間的に「カベ」をつくりがちです。

ですから奉仕者は、心を開き、時間をかけ、話しを聞くことが大切です。

さずける時は、動作を丁寧に、きれいにし、言葉と動作によって病人と心を合わせる必要があります。

③ソーシャルワーカーから

訪問する方は、先入観を持たずに病者、施設生活者を訪問してもらいたい。

接する時は、寄り添いながら病者、施設生活者の心が「治される」ような、言葉使い、聞く心が求められます。

病者、施設生活者は自分自身の心の「さけび」「心のなぐさめ」を求めており、心がみたされることを望んでいます。

彼等が第三者だから言えることに心を開き耳を傾けてほしいのです。でも守秘義務はかならず守って下さい。

「子供の人権（1）胎児のいのち」

講師 堀 邑 江さん（カリタス家庭支援センター代表）

2010年12月10日（金）〔世界人権デー〕
18：30～20：30 カトリック北一条教会・カテドラルホール 参加者 15名
主催 カトリック札幌地区・社会委員会

「世界人権宣言1948年」から60余年がたちます。1人ひとりにとり、かけがえのない人権が大切にされ、活かされるよう、身近なところからでも学びたいと、本シリーズを企画しました。

講演要旨

カトリック・ソーシャルワーカーの立場から、胎児のいのちとの関わり方の現場からの学びをご報告し、今私たちにできることを提案したいと思えます。

お話の前に、生命尊重ビデオ「いのち美しいもの・One&Only」をごらん下さい。（約20分）

年間失われる胎児の命は届け出数だけでも25万件（内10代の中絶件数2万3千件）あり、戦後60余年で7千3百万にのぼると言われます。（わが国では、母体保護法により妊娠22週までの中絶は認められている。）

人工中絶が選ばれる事情は、①未婚・若年・婚外・結婚できない相手・夫以外の人など予定外で思いがけなく、望まない妊娠 ②多子で3番目以降の児 ③経済的理由 ④病弱・服薬などによる母体の不安、などさまざまです。



思いがけない妊娠を知ったとき、否認し拒絶し、無かったことにしたい（本人だけでなく家族も）と、思ってしまう。胎児は自分を脅かす存在ではないかと恐怖します。本能的母性、命をうばっていいのかという価値観、手術への恐怖などで迷います。家出中に19歳の男性と13歳で妊娠し、やむなく母に連絡したところ、母は生むように援助したケースもありました。30年ほど前のことですが、今はこんな母親はいないようです。

人工中絶をした女性は、永くその苦しみをかかえています。中絶10年後にたずねてきた妊婦さんは、その間の苦しみをうたっていました。一人ぐらしの80歳の女性が「娘がいるけれど娘のところへは行けない。私は幸になってはいけないのです。」と語っていました。その女性は戦後に中絶をし、「昔、子供を殺していますから」と。いまも苦しみが続いているのです。

生む、中絶どちらも、いのちと母の一生がかかっている分岐点です。分岐点での介入は大切なことだと思います。どちらも苦しみであるなら、生む苦しみの方が実のある苦しみではないでしょうか。障がいがあっても、若くても、育てることをこころみるうちに、家族も皆支援するようになるのです。

私たちはどのように関わったらよいのでしょうか。そして私たちにできることは何でしょうか。①誰でも起こりうることであり、わかろうとする関わり。②責めない、裁かない、辱めない。③どこで育てるの？ だれが育てるの？ どこに住む？ 出産費用（35～40万円）はどうする？ など具体的な生活支援。こまったらカリタス家庭支援センターへ！④その人が気づき、その気になるように、主体性の尊重。⑤正しい性教育の普及。⑥円ブリオ活動との連携（円ブリオ募金にご協力を！）などさまざまな関わりがあります。

さまざまな事情で、人工妊娠中絶を選ばざるを得ない状況に置かれた兄弟姉妹を、裁くことなく、辱めることなく、また仕方のないこととして不問にするという見せかけだけの優しさでもなく、方法があることを示しつつ、共に生きるよう努めたいと思います。

（文責：社会委員会 松井洋治）

編集後記

寒い季節をお元気でお過ごしでしょうか！

昨年は宣司評の研修会・講習会が好評で受講者が沢山参加されました。又「ともに」の発刊にあたりまして心よく寄稿して下さいましたこと感謝申し上げます。

全ての人々が平和であること祈りながら自分を取囲む厳しい環境の変化にとり残されないよう考えて行きたいと思えます。

（M・T）